



が記されていますが、その中の「おくびょう者」とは、真理の光に照らされた後も、主に不忠実でこの世に「恐れ退いて滅びる者」でないとしたら、どのような者のことなのでしょう（ヘブル人10：24-39、ヤコブ4：17）。これらのたとえは、キリストを受け入れ信仰告白して信者になったつもりの方たちの中にも、キリストに拒まれる者がいることを示唆しています。たとえから主の目に「良い忠実なしもべ」と認められるのは、与えられた能力を最大限に用いることによって主に仕えた者で、「悪いなまけ者のしもべ」として裁かれ、追い出されるのは、できる善を怠って主に仕えなかった者たちであることは明白です。しかし先月パウロのコリント人への第一の手紙から学んだように、また、イエスのたとえの中の主人の言葉「だったら、なぜ、私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。」（ルカ19：23、マタイ25：27、下線付加）からも明らかなように、主が戻ってこられたとき差し出す成果が「木、草、わら」、「利息」など、たとえつまらないものであっても、少なくとも主に対する姿勢、忠誠は評価され、滅びに至る裁きを免れることができるのです。それとは対照的に、主から任された責務を怠り、主の羊の世話をしないでこの世に迎合、放縦の生活に身を任せる者（マタイ24：45-51、ルカ12：42-48）、「主よ、主よ。」と主の名を呼びながら主の命ぜられたことや天の父の御旨を行なわない者はみな、不忠実なしもべ「不法をなす者」として偽善者たちと同じ扱いを受けることになるのです（ルカ6：46、マタイ7：21-23）。

冒頭に引用したパウロの書簡はすべて、信仰生活を収穫の分け前に与るため賞、栄冠を目指してひたむきに走る競技者にたとえた箇所ですが、「信仰によって与えられる永遠の命、救いは神の一方的な恩寵」というキリスト教の根幹を成す至極単純な教えに同調しないせいか、解説書ではほとんど取り上げていないか、あるいは、信仰生活とは忍耐をもって二心のない献身の道を歩むことであるという奨励の解説に留まっているようです。しかし、賞、決勝点、栄冠、目標、兵役、労苦した農夫、収穫の分け前 等々、繰り返し用いられている言葉、「自分自身が失格者になるようなことのないため」「成人である者はみな、このような考え方をしましょう」「イエス・キリストをいつも思いなさい」という語りかけ、また、パウロの他の書簡にも繰り返されている同じような奨励は、先に取り上げたイエスのたとえに照らしても、もっと深刻に、イエス・キリストを受け入れた者への警告として捉えるべきでしょう。パウロは諸書簡の中で、「私の福音」という表現を用いて「賜物」である救いではなく、「賞」である報酬を強調し、「キリストの福音」と分けて語っている節があります。「わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせ（ます）」（ヨハネ6：40）というイエスの約束は、全人類にもたらされた「キリストの福音」です。この救いは信じる者だれにでも無条件で与えられる神の恩寵、「賜物」です。この賜物、永遠の命を得るには、ただキリストを信じさえすればよいのです。しかし、ローマ人への手紙5：15-21で、この「キリストの恵みによる賜物」、永遠の命について語っている

パウロも、冒頭に挙げた件では、報酬としての賞、栄冠を語っています。この栄冠を得るには、走る必要があるのです。成熟したキリストの立派な兵士は柵から落ちるぼた餅を受身の姿勢で待っている者ではなく、「徴募した者（神）を喜ばせるため」労苦を惜まず、完全にされるべく「聖化（聖め）」の過程を歩む者なのです。

パウロが主に在る兄弟姉妹に、不誠実のゆえに未信者と同じ裁きに服することがないようにと警告としてこれらの書簡を書いたと思われる根拠は、ピリピ人への手紙3章の文脈から窺えます。「最後に、私の兄弟たち．．．あなたがたの安全のためにもなることです。」と書き出したパウロは、手紙の中ほどで、『キリスト信仰の過去、現在、未来の三段階の原則』に言及しています。(1)信仰義認9節—過去 (2)聖化10節—現在 (3)栄光化11節—未来 です。「まだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより」（ローマ人5：8）開かれた救いの道（信仰義認）も、(2)～(3)の過程を無事通って初めて、完成を見ることになるのです。主の再臨のとき、「死者の中からの復活に達（する）」ことによって栄光の体に変えられるという目標、救いの完成に至るには、現在直面している聖化の過程に大きな意味があるのです。聖化の過程を耐え忍び、報酬に与る者だけが、すなわち、主に在って成熟した「成人である者」だけが目標を達成する者だからです。ですから、パウロは、無条件の救い、永遠の命を得たから安心と、(1)の状態に安住することなく、主の再臨のときの報酬に照準を合わせ、甦られたキリストのようになりたいと主を仰ぎ見、「ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないため」、わき目もふらず走り続けているのです。

またパウロは、永遠の救いに照準を置いた神の恩寵「キリストの福音」に対し、キリストの再臨のときの「第一の復活」に照準を置いた、栄冠を勝ち取るための信仰の歩みを奨励する「私の福音」を、コリント人への第一の手紙3章で、「堅い食物」をこなす信者の状態にたとえています。パウロにとって、そのような歩み、「私の福音」を実践している人たちは、「御霊に属する人」で、教会の中のねたみや争いとは無縁なのですが、「乳」しか消化できない「肉に属する人」は「キリストにある幼子」の状態に甘んじている「ただの人のように歩んでいる」、(1)の段階に留まっている信者のことなのです。パウロは、主に在る兄弟姉妹をキリストの花嫁に相応しく築き上げるための奨励、「キリストのさばきの座」での報酬に与る歩みへの説得、自分の歩みにならうようにとさえ豪語した厳しい書簡を残していますが、ペテロが、「その手紙の中には理解しにくいところもあります」（第二ペテロ3：16）と語ったのは、あるいは、第三の天にまで引き上げられ、パウロにだけ啓示された「私の福音」だったのかもしれませんが。